

第69回JIAアーバントリップ 見学会の報告

実施日 : 2012年6月15日

テーマ : 「 挑戦する建築、3 事例を訪ねる 」

見学主旨

69 回アーバントリップは千葉県を訪れ、先鋭的な3つの建物を見学する。

ホキ美術館とナチュラルシームはスチール構造の魅力に溢れた建物である。

ホキ美術館は 30m のキャンティレバーで構造への挑戦をしている。構造形式 = スチールの一体構造 を生かして、ギャラリーに特徴のある浮遊感を生み出した。さらに外部に向けて連続したスリット状の窓を設け、30mに及ぶキャンティレバーが、絵画ギャラリーであることを外部からでも認識できる形になっている。

ナチュラルシームは、スチール製工業化住宅を一般化することに挑戦し、スチールメーカーと共同開発して、ギャラリー使用の目的で建設された。施工の汎用性と住み手の個性が反映される許容度の高いピュアなシステムの構築を意図している。

千葉市美浜文化ホール・保健福祉センターは公共性の高い文化ホールと、プライベート性質の高い保健福祉センターの複合という、日常的には両立しにくい機能の複合に挑戦した。この解決策として利用主体と開館時間によってゾーニングし、利用者間での相互交流、効率的な施設運用がはかられる建築を目指した。

見学施設

1. ホキ美術館

住所:千葉県千葉市緑区あすみが丘東3-15

竣工:2010年8月

設計:山梨知彦+中本太郎+鈴木隆+矢野雅規+向野聡彦/日建設計

案内:鈴木隆/日建設計

2. ナチュラルシーム

住所:千葉縣市川市

竣工:2004年4月

設計:遠藤政樹+池田昌弘/EDH 遠藤設計室+池田昌弘建築研究所

案内:遠藤政樹/EDH 遠藤設計室

3. 千葉市美浜文化ホール・保健福祉センター

住所:千葉県千葉市美浜区真砂5-15-2

竣工:2007年2月

設計:小泉雅生+村井一知/小泉アトリエ+村井建築設計事務所

案内:木下昌大/小泉アトリエ(元所員、現在 木下昌大建築設計事務所)

ホキ美術館 外観写真



このキャンティレバー内がギャラリーとなっている





ナチュラルシーム エントランス部分



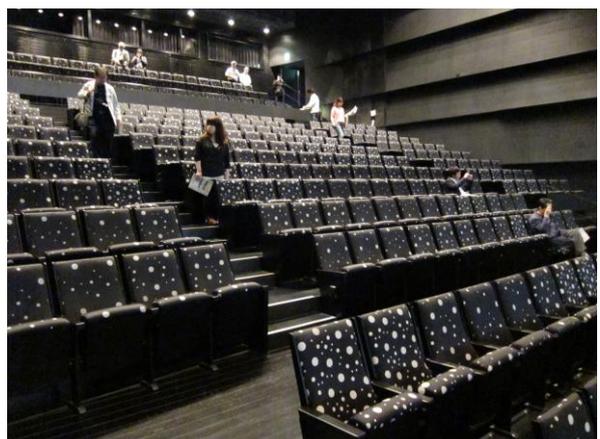
全体模型 (下2枚)外観写真



千葉市美浜文化ホール・保健福祉センター



メインホール



外観写真



音楽ホール



第 69 回アーバントリップ見学記

「挑戦する建築」

豊永信彦 椎名政夫建築設計事務所 (Bulletin 2012年11月号より)

6月の梅雨時にもかかわらず好天に恵まれた一日、千葉県内のいずれもチャレンジングな建築3作品を、設計者自らの解説と共に見学出来る、またとない機会を得る事が出来た。

■ホキ美術館(設計:日建設計)

写実細密画の個人コレクションを収蔵する美術館で、新興住宅地と公園緑地の狭間に位置する。湾曲しつつ連続して屈折し、一部浮遊し、また端部で極限までに空中に跳ね出たそのダイナミックな姿は圧巻であるが、個々は、恣意的でない、直面した問題の周到な解決の結果との設計者の説明に、一同聞き入った。

BIMをはじめ様々なコンピューティングの結果という事で、組織事務所ならではの力技であるが、一貫してその隅々まで焦点が合致した数々の秀逸なディテールは、この収蔵品の容器として相応しい、まさしくスーパーリアリズムその物といった趣きであった。さり気なく間仕切りガラスに刻まれた数百人もの工事関係者全員のリストが、映画のエンディングロールの様で、竣工までの彼等の膨大な熱意が、胸を打つ。

■ナチュラルシーム(設計:遠藤政樹+池田昌弘)

設計者が建材メーカーと共同開発した工業化住宅のプロトハウスを、プロモーション用ギャラリーとして開放している。プランは厳密にモジュール化され、今回独自に開発された様々な開閉部ユニットにより多様なパターンに対応する様、高度に工夫されている。住宅街の広大な緑地の中で、内外共に黒く彩色された直交する二つのボックスは、既存樹木への配慮により、空中に大きく跳ね出し静止している。ユニット開発に向けての緻密な模索、そのシルエットと共に熱く挑戦的であるが、目の前にあるのは、計算尽くの最小限の筆致で描かれた一幅の水墨画の様な、凜とした設えであった。

■美浜文化ホール・保健福祉センター(設計:小泉雅生+村井一知)

コミュニティのための文化ホールと福祉施設を併設した複合施設。開放性のレベルが異なる異種用途をあえて共存させることで、施設内外で新たなアクティビティを誘発させる仕掛けを実現している。

街区側と公園広場側では異なる表情を与え、特に広場側では、内部機能をプログラムに柔軟に対応出来る様、大小様々の剥き出しのユニット群として自由に空中に突出させている。単調になりがちな巨大施設の立面に、即興的で、かつ印象深いリズムを刻むと同時に、内部利用者の行為・賑わいを外部に湧出させる意図である。プログラムを可視化した、製作過程をも作品化するインスタレーションが如くの建築で、内外共にカジュアルで楽しみな語り口で溢れている。

規模・用途、手法も三者三様だが、各々独自の着想点から、途中の深き模索の過程、そして実現化という到達点までの長い軌跡が、普段垣間見る事の出来ない挑戦の物語として隠れている。そしてその挑戦者に求められるのは、真摯な探求心と果敢な勇氣、不断の熱意であるという事実と共に。参加者一同、大いに胸を熱くし、また勇氣づけられた貴重な一日であった。